

国際バカロレアの外国語科目「Language B」における 評価活動と学習内容

赤塚 祐哉^A

Assessment Instruments and Learning Contents of International Baccalaureate Language B

Yuya AKATSUKA^A

Keywords: International Baccalaureate, Language B, Assessment, Authentic materials
キーワード：国際バカロレア、ランゲージ B、評価、オーセンティックな素材

1 はじめに

小学校5年生から高等学校までの8年間、あるいは大学まで英語教育を受け続け、実際に英語が使えるレベルになったと自信をもって言える日本人はどのくらいいるだろうか。英語が使えるレベルという定義は様々考えられるが、外国語の熟達度の目安を示す欧州言語共通参照枠(CEFR)の B2 レベル(複雑な文章の主要な内容を理解したり、幅広い話題について、明確で詳細な文章を作ることができたりする)に到達できていることが高校卒業時の世界的な標準であると言える。例えば、新聞や書物、電子メールやウェブ上の記事等を読んで内容を十分に理解したり、様々な文体で英文を書いたりすることが該当する。一方、日本の現状に目を移すと必ずしもそのようなレベルに到達できているとは到底言えない。筆者が非常勤講師を勤めている大学の学部1年生のうち、筆者の授業を履修した240名に、高校生時のどのような英語授業を受けていたかアンケートをとったところ、「生徒に単語・

文法を覚えさせ、確認テストを実施する」ことや「教科書の英文を和訳させる」こと。そして、「受験対策として問題集を解かせ、答え合わせと解説を行う」といった英語授業を受けた学生が8割以上に上った。1年生の春学期始めに、筆者の授業を履修した学生240名に英語コミュニケーション能力テストである CASEC を受検させたところ、学生の半数以上が CEFR A2 レベル(なじみのある内容や基本的な文が理解でき、簡単に単純な情報交換ができる)に該当し、CEFR B2 レベルに達していた学生は1割にも満たなかった。

こうした結果から、2009年度版(平成21年3月告示)の高等学校学習指導要領で「授業は英語で行う」ことが明記され、教科書の英文を和訳するといった偏った指導を見直すきっかけになっているはずだが、そうとは言えない現状も垣間見える。日本の英語授業は世界標準の英語授業からほど遠い「ガラパゴス的な英語教育」(小池2013)¹⁾になっており、次期学習指導要領が目指す主体的・対話的で深い学びに到達するためには相当な改革が必要であると考え、その参考と

A: 早稲田大学本庄高等学院

なるのが国際バカロレア¹⁾の外国語（英語）授業である。

2 国際バカロレアの外国語（英語）教育

では、なぜ国際バカロレアの外国語（英語）授業が参考となるのか。近年、グローバル人材育成が日本の国家的な教育課題として取り上げられ、グローバルな場面で活躍できる英語力育成が大きな課題であるとしている。特にグローバル人材育成に役立つ教育プログラムとして、文科省は国際バカロレアに注目し、これまでに国際バカロレアの教育プログラムの指導内容、評価内容やその方法についての文科省の大臣官房国際課国際協力企画室が音頭を取って調査を行ってきた。また、グローバルな場面で活躍できる生徒の英語力育成についても、「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」(平成 26 年 9 月) (文部科学省 2014)²⁾等で議論されるなど、グローバル人材育成と英語力育成はいわばパッケージとして議論されてきた経緯がある。国際バカロレアの外国語（英語）科目である「Language B(English)」では発表や議論、様々なコンテキストでのライティング活動を行い、自分の意見や考えを論理的にかつ説得力をもって相手に伝えるような内容となっている。そして世界標準の教育プログラムである国際バカロレアでは様々な言語背景をもつ生徒達が同じクラスで学ぶことを前提としており、授業中の使用言語は原則として英語、フランス語、あるいはスペイン語を使用するよう規定している。当然、外国語(英語)授業では英語を使用することになるので、日本語を挟む余地はほぼ無いに等しい。こうした Language B(English)の特徴は、文科省が目指そうとする英語教育改革の考え方に共通する部分があり、これからの新しい英語教育に向けた示唆に富んだ内容と言える。

ところが、筑波大学が主導で行った「国際バカロレア教育推進のための公聴会」(2017 年)では、国際バカロレアの教育効果の検証は途上であると指摘されており、Language B(English)に関する国内での調査・研究は少ないのが現状である (例:赤塚 2017³⁾, 河野 2016⁴⁾等)。そこで、本稿ではグローバル人材として必要な英語力育成につながる「Language B(English)」について、その特徴を評価活動と学習内容の視点から

解説したい。

3 Language B(English)の評価活動

ここではLanguage B(English)でどのような評価活動を行うのか、その特徴を解説する。

3.1 Language B(English)の評価活動

Language B(English)の評価活動は全世界共通で実施され、北半球の国や地域は主に 11 月に、南半球の国や地域では主に 5 月に行われることが多い。日本の学校の場合、多くが 11 月に実施される。また評価活動は全部で 3 種類あり、1 つめが Paper 1 と呼ばれるライティング試験、2 つめが Paper 2 と呼ばれるリスニングとリーディングの試験、そして 3 つめが Individual oral と呼ばれる口頭試問である。なお、評価活動には次の表 1 に示すようなものがある。

表 1 Language B(English)の評価活動とその概要

名称	内容
Paper 1	ライティング能力を測る試験。試験時間は 1 時間 15 分。3 つのトピックから 1 つを選び、250 語から 400 語で筆記する。
Paper 2	リスニングとリーディングの力を測ることを目的とする。リスニングでは 2～3 分程度の音声流れるが、リスニング問題用に加工されたものではなく、実生活の場面で使用されているオーセンティックなものが出題される。そのため、周囲の雑音や話し手同士がオーバーラップしながら会話するような場面も含まれる。
Individual Oral	写真や絵が提示され、15 分程度で自分の意見や考え言うための準備を行う。その後、3-4 分で発表を行う。さらに教師と議論を行う。

International Baccalaureate Organization. (2017).⁵⁾より作成

表 1 に示した評価活動のうち、とりわけ Individual Oral が特徴的である。様々なトピック (例:サブカル

チャー、習慣・伝統、コミュニケーションとメディア、テクノロジー等)に関連する写真あるいは絵が教師から提示され、15分間の準備時間が与えられた後に3-4分でプレゼンテーションを行う。プレゼンテーションでは、生徒は写真や絵から読み取れる情報を伝えるとともに、トピックとどのような関連性があるのかを説明することが求められる。さらに自分の意見や考えを付け加える。その後の教師との議論では、即興で教師による質問に答えたり、英語圏の文化と自国の文化との比較等を行ったりする。Individual Oral で使用される写真・絵は英語圏で撮影されたものを使用することになっており、サンプルは Cambridge University Press. (2013)⁶⁾等で閲覧可能である。なお、Individual Oral の結果は、以下の評価規準に基づき得点が付けられる(表2)。

表2 Individual Oral の評価規準

①基準 A 言語 (12 点満点) 語彙や文法、イディオムが適切に使用されているか、発音やイントネーションが適切か。
②基準 B1 メッセージ (写真・絵) (6 点満点) 写真や絵についての描写が的確か、英語圏の文化について明確に説明しているか。
③基準 B2 メッセージ (会話) (6 点満点) 教師による質問に適切に答えているか、深いレベルで議論ができていないか。
④基準 C インタラクションスキル (6 点満点) 会話の内容を理解し、自分の意見や考えを明確に述べているか、会話が継続できているか。

International Baccalaureate Organization. (2018)⁷⁾より作成

4 Language B(English)の学習内容

4.1 検定教科書と Language B(English)の教材の違い

例えば、地球温暖化について学ぶ場合、文部科学省が発行する学習指導要領「外国語」に基づいた検定教科書では以下のような質問が学習者に投げかけられる。

- 1) Why do some politicians disagree on the Kyoto Protocol?
- 2) Which countries are mostly damaged by global

warming?

これらの質問は検定教科書に掲載されている論説文を読むと答えが見つけ出せるようになっており、解答にあたっては自分の意見・考えを述べるようなことは特に求められていない。いわゆる低次思考力(記憶・理解・応用)を測る問いが中心となっているのが特徴であり、検定教科書ではこうした問いが多くを占めている。一方、Language B(English)の教材では以下のような問いが投げかけられる。

(小さい氷の上で北極熊が1頭だけ座っている写真や、洪水の中ゴムボートに乗って避難している東南アジアに住む家族の写真を見て)“Which do you find more effective in warning against the dangers of global warming?”(Cambridge University Press. (2013)⁶⁾より作成)

検定教科書の低次思考力を測る問いとは異なり、自分の意見・考えを相手に伝える力、いわゆる高次思考力(分析・評価・創造)が求められていることが分かる。このように同じ地球温暖化という切り口で英語学習を行う場合でも、検定教科書に基づいた英語授業と language B(English)では学びの視点が大きく異なる。Language B(English)では答えが1つは限らない問いについて答えるタイプのもが多くを占めるが、授業中に繰り返しこうした問いについて答えることで多様な複雑なグローバルな諸課題に対応できる人材育成につながるのではないだろうか。

4.2 Language B(English)の教材構成

検定教科書では、①学習の到達目標を知る、②語彙の発音練習・意味確認を行う、③英語で書かれた論説文を読む、④内容理解の程度を確かめる質問に答える、⑤言語材料(文法)の演習を並び替え等を通して行う、といった流れになっている。検定教科書のタイトルには「Communication English」と書かれているが、肝心の Communication を促す場面がほとんど見られず、そのほとんどが英文読解と文法演習といった内容となっているのが現状である。

一方、Language B(English)の教材は概ね以下のような流れとなっている。ここでは Cambridge

University Press. (2013)⁷⁾の Leisure (余暇) について扱う単元(pp. 240-267)について解説したい。

①背景知識 (スキーマ) の活性化

レッスンに入る前に、Write down three things you do in your leisure time on a piece of paper.のような問いに答え、その後ペアやグループで意見交換を行うといった活動が用意されている。

②知識を深める

Leisure に関することわざを読み、それぞれがどのような意味なのかを知り、そしてどのことわざに自分が賛同するかしないのかをペアやグループで意見交換する。

(紹介されていることわざの一例)

'In our leisure we reveal what kind of people we are.'
(Ovid 43BC-AD18)

Idle hands are the devil's tools.(Geoffrey Chaucer
1343-1400)

③語彙の意味を確認する

これから読む英文に登場する語彙の一覧を見て、どのような意味なのかを確認する。また、語彙の一覧を見て、どのようなことが書かれているのかを類推する学習活動もみられる。

(掲載されている語彙の一例)

hazards = dangers or threats, submerged = underwater, corpses = dead bodies, deceleration = slowing down.

④オーセンティックな素材を読む。

英語圏の雑誌や新聞、パンフレット等に掲載されているオーセンティックな英文 (教材用に加工されていない素材) を読む。なお、leisure の例として、教材では「危険なスポーツ (dangerous sports)」というタイトルのブログ記事が取り上げられている。日本の検定教科書とは異なり、様々な文体の英文が素の状態で見られることが大きな特徴である。

⑤内容理解を測る問いに答える。

英文の内容理解の程度を確かめる質問に答える。例えば、'What are two dangerous aspects of heli-

skiing?' や 'What makes cave diving so dangerous?' といった問いが投げかけられている。このような問いは日本の検定教科書でも同様に見られるものである。

⑥自分の意見や考えを求める問いに答える。

日本の検定教科書ではこういったタイプの問いはほとんど見られないが、Language B(English)の教材では多くみられる。例えば、教材では危険なスポーツにそのリスクをユーモアと共に紹介されているが、'Go back and find three humorous quotes from the text. Why are these parts of the text funny? How does the author use language to make you laugh? Do you think it is acceptable to make a joke of these injuries and deaths?' (Cambridge University Press. (2013)⁷⁾ p.257 より引用) といった問いが投げかけられており、自分の意見や考えを教材の英文を引用したり、エビデンスを付け加えたりしながら相手に伝える活動が用意されている。

⑦特定の素材形式に沿って、ライティングを行う。

電子メールを作成したり、ブログを書いたり、新聞記事を書いたり、といった学習活動が用意されている。例えば教材では、IOC に手紙を書く場合を想定してライティングを行う活動がある。

(例) "Write a letter to the IOC in which you recommend that a particular sport becomes an official Olympic sport. In your letter give evidence to support your arguments." (Cambridge University Press. (2013)⁷⁾ (p. 262)より引用)

検定教科書では主に 70~80 語程度で "Which do you prefer to play major sports or dangerous sports?" のように与えられたテーマでパラグラフライティングを行う活動が多くを占め、読み手や目的といったことは特に意識されることは少ない。一方、Language B(English)では様々な文体を読み、その文体に沿って自分で意見や考えを書くという活動が行われることが特徴である。

加えて、Language B(English)のライティングでは読み手として誰を想定しているのか、書いているメッセージの目的は何か (例: 読み手へのリクエストなの

か、提案なのか、説明なのか等) といったことを考えながらライティングを行うことも大きな特徴である。

5 今後の展望

Language B(English)は世界標準のプログラムの中に設置されている科目であり、当然授業中はほぼすべてが英語である。日本語を挟む余地はほぼ皆無であり、試験内容についても、どの国や地域にいてもレベル感や内容は同一である。日本人に配慮した問題、というのも一切なく、試験ではどこの国や地域にしようとも同じ規準で評価される。また、Language B(English)は学ぶ内容や指導方法も統一されており、多くのオーセンティックな英語素材を読み、そして様々な形式で文章を作成していくことを特徴としている。2017年12月には文部科学省主導で、国際バカロレアの教育プログラムを高等学校に広く取り入れていく官民・研究機関合同のコンソーシアム構想が公表された。今後、国際バカロレアの外国語科目 Language B(English)を参考とした英語授業が日本各地の高等学校で取り入れられ、グローバルな場面で活躍できる英語力を備えた人材が数多く輩出されることを期待したい。

注

[1] 国際バカロレアは1968年に創立されたスイス政府認可の非営利教育団体で、本部はスイスのジュネーブにある。英語表記で International Baccalaureate®、略して IB と呼ばれ、日本国内には国際学校 (インターナショナルスクール) や学校教育法第1条に規定されている学校を併せて計46校ある(2017年12月30日現在)。

引用・参考文献

- 1) 小池生夫.(2013). *提言 日本の英語教育—ガラパゴスからの脱出*. 東京: 光村図書出版.
- 2) 文部科学省.(2014). *今後の英語教育の改善・充実方策について 報告—グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言—*.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm (2017年12月30日参照)
- 3) 赤塚祐哉.(2017). 国際バカロレア・ディプロマプログラム言語 B の教育手法を参考とした授業を受けた学習者の意識 (一般の高等学校でのモデル構築に向けて). *国際バカロレア教育研究*1(1). 30-38
- 4) 河野円.(2016). *A Comparison of English Textbooks from the Perspectives of Reading: IB Diploma Programs and Japanese Senior High School. The Asian Conference of Language Learning 2016 Official Conference Proceedings*.
http://papers.iafor.org/papers/acll2016/ACLL2016_29495.pdf (2017年12月30日参照)
- 5) International Baccalaureate Organization. (2017). *Language acquisition curriculum review: Third Report to Teachers. May 2017*. Cardiff, UK: International Baccalaureate Organization.
- 6) Cambridge University Press. (2013). *English B for the IB Diploma*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- 7) International Baccalaureate Organization. (2018). *Diploma Programme Language B guide*. Cardiff, UK: International Baccalaureate Organization.

受付日 2018年1月1日、受理日 2018年3月10日